

以下 汚れあり

以下 虫食い

破損あり

1/24



其南

号
晋子
中没

症
貝
晋
蕭
祚

四月朔日あり風起りて山嶺の松ありはる
 空の西より少なりて波の音も色も波
 か夏に來たりしと色もなほ
 ちう磯の梢の色も香も夏に來りて山に
 二日あり頻て杜るるの音も波ありあり
 きあはれぬ
 三日例の日ありて 首夏に
 のきもなほありて波の音も色も波
 谷の光
 世にありて波の音も色も波
 寄水雜戀

新進の世をひかぬは業か月より先
知れ如月

名づつ後月を月神と云ふぬ新進の
寄月初戀

九日少海はかぬ
此の世もかぬ月はかぬよりかぬ

十日七つしは月神のつれは海もあつては
鳴ありけり

十一日郭三つしは月神のつれは海もあつては
鳴ありけり

十二日郭三つしは月神のつれは海もあつては
鳴ありけり

十三日郭三つしは月神のつれは海もあつては
鳴ありけり

誰里の世のやせむの文心はあつては
鳴ありけり

十四日郭三つしは月神のつれは海もあつては
鳴ありけり

十五日郭三つしは月神のつれは海もあつては
鳴ありけり

十六日郭三つしは月神のつれは海もあつては
鳴ありけり

十七日郭三つしは月神のつれは海もあつては
鳴ありけり

十八日郭三つしは月神のつれは海もあつては
鳴ありけり

十九日郭三つしは月神のつれは海もあつては
鳴ありけり

二十日郭三つしは月神のつれは海もあつては
鳴ありけり

二十一日郭三つしは月神のつれは海もあつては
鳴ありけり

二十二日郭三つしは月神のつれは海もあつては
鳴ありけり

二十三日郭三つしは月神のつれは海もあつては
鳴ありけり

と花を辨るおもしろきあり流湊く夏は待
岩更夜

夏草のまじりし山あき夜に宿の世帯
年々いづれ月影の山室もゆくを
山餘花

わたり行くも花のまき、ぬいすも松蔭の山
宿のまじりし山あき夜に宿の世帯
卯を盛

月が君を照ひて今幾日盛とてなほ卯を
離れ卯と月夜よりいづれ中へ満ちる
寄岩更夜

二年より志ありあき葉をてはねて
二

石浜の情ありと神山ありと名をて
寄岩更夜

石浜の情ありと神山ありと名をて
寄岩更夜

深山泉

深山の泉はまじりし山あき夜に宿の世帯
年々いづれ月影の山室もゆくを
山餘花

わたり行くも花のまき、ぬいすも松蔭の山
宿のまじりし山あき夜に宿の世帯
卯を盛

道の味をいふと

十六日西渡山の森見ふゆりて

十七日西渡山をゆりて

十八日西渡山をゆりて

十九日西渡山をゆりて

二十日西渡山をゆりて

寄常盤木邊

長村もはるかに色ゆる

十九日北川時房村

二十日北川時房村

二十一日北川時房村

二十二日北川時房村

二十三日北川時房村

二十四日北川時房村

二十五日北川時房村

二十六日北川時房村

二十七日北川時房村

二十八日北川時房村

二十九日北川時房村

三十日北川時房村

三十一日北川時房村

三十二日北川時房村

生れつゝ子よふもなきやして其れおほけりて
すめぬ其れをせはけりやしのひれもより為
ゆへりけり起りて十年ふさるゝせをせぬ
そはけりてにけりしなり

夏をかくみりて夏世なりとてそを計中
ひらの遠く海邊ふらむひらわたり河を
かゝりてふらむをありてくもりをけり破造の
小舟にのりてひら日まをふらむなり
かゝりてひらをのりてふらむ先前船
も海にまをりてふらむ山をふらむなり
おろき破造の船にのりてひら海にぬ
五洲の船にのりてふらむ海をふらむ各船

二日 後子あやう牡丹いせ

一枝とあるも見ゆも香もいづこもいづれ
をとりけり

ひらをいづれも見ゆも香もいづれ
又推飯真の軒のあやう牡丹いせ
そはけりてにけりしなり

言の葉はなれぬとて子紀をいづれ
返

初めに初め詞も夏末とてそを計中
廿日 集ひたりて文をいづれに
杜間郭云

一歩を杖の本始り不帰之を足に立たれ
うをすけしと田井の書ら之別と角由
雨中早苗

さかして神はひもあまを誘ておれく山
うはら早苗もみも水越々千町の田
曳草蒲

や草にあまの別ぬ沼ありて青くあまの別
あまの草神を夕前ひきあまの神や誘て自
旅花昌蒲

はめ手も流ひひる子りきてふひ旅の神
草蒲草まうじも為旅文と心も白
隣れと橘

か道なる水邊のむすてふ花を自他外のもの
花は別れはなご白あはれも道はあり
寄登戀

あまの波は流魂の世もあて根之を
今も海を全かたはるのいも
岸忘草

あまの波は流魂の世もあて根之を
今も海を全かたはるのいも
澤菱

あまの波は流魂の世もあて根之を
今も海を全かたはるのいも
御井

末の巻もたかくて存心の中も終り也
 多様のなまはし世に三多様の中は
 廿二日とて書ししはたはあつていかに
 けしけ白ひのしるしの中の本を懸りて
 けし油の濁りて白く其の打本のほし
 ぬき懸りてありぬ
 廿三日夕の絶ててあり
 馬上岡郭云
 駒之川の水もさきさき山より来る
 隙物も速也
 稀かたに速きもの波あはれぬ
 行舟夜已深
 心子の月夜も山影もあはれぬ

夕の巻もたかく
 廿四日ありありたる夜に櫻島杖の山に
 是よりしるしの水もさきさき山より来る
 隙物も速也
 子高子心もさきさき櫻島杖の山に
 廿五日わらわの天満神もさきさき
 山より来る水もさきさき
 あり山影もあはれぬ
 廿六日とて書ししはたはあつていかに
 廿七日北川もさきさき温泉もさきさき
 人あはれぬ山影もあはれぬ
 井もさきさき山影もあはれぬ

廿日、第題、二首、この序、 風、郭、

吹の流、ひらり、おき、ひや、ひらり、ひらり、夜、此、

雨中、郭、

あ、い、な、の、も、も、時、書、ゆ、り、も、も、

寄里、侍、恋、

女、の、ゆ、の、中、と、あ、や、と、涼、山、里、中、の、ひ、

中、よ、一、十、首、の、題、と、序、文、 橋、草、堂、

乃、後、も、ゆ、の、流、ひ、ら、り、と、遠、く、た、白、く、も、

誰、と、い、ふ、を、知、る、も、な、ら、ず、い、ま、の、人、軒、の、

初、月、雨、

日、花、ひ、と、長、江、を、な、る、舟、も、な、り、ゆ、り、水、

不、雨、の、多、く、い、ま、の、時、も、な、ら、ず、

曙、水、鶏、

あ、い、な、の、も、も、時、書、ゆ、り、も、も、

天、の、や、つ、唯、も、な、ら、ず、

夏、月、涼、

ゆ、中、を、し、つ、圓、居、ふ、誰、袖、涼、く、も、夏、夜、の、月、

涼、く、も、あ、い、な、の、流、ひ、ら、り、と、遠、く、た、白、く、も、

朝、醒、妻、

あ、い、な、の、も、も、時、書、ゆ、り、も、も、

床、夏、の、と、い、ふ、朝、醒、妻、

寄、花、妻、戀、

あ、い、な、の、も、も、時、書、ゆ、り、も、も、

あ、い、な、の、も、も、時、書、ゆ、り、も、も、

寄柏木憲

山家瀧

寄柏木憲
お侍の御もてて柏木はかきまきの思はん
まじりしはあまの思ひまてつふまに
山家瀧
か海里岩飛つ流るるを思ふに
かひとつと流るるを思ふに
田家人稀

寄民祝

寄民祝
おつれさうさし
おつれさうさし
おつれさうさし
おつれさうさし
おつれさうさし

廿九日卯月
日教
時書

八月朔三日とて鳴ゆるにやあはれ
しりき文はあつた

中まじり情も夏あつた早月
二月山北月のぬきもあつた
文もあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

三日亥の時
郭二のとき
冒夜遺時書
のちをりあつたあつたあつた

里のあつたあつたあつたあつた

七ありは返つてはつ
 軒かひのなほおきての浦にきくの草
 夕れ進めめわあめわのりやあけ
 るのでるは母の糸とてあはる糸の
 昌蒲まきせり
 又日夕のあいの初つりぬ
 あめの草らせとけて初はあめあめ
 文子のぬ籠まゆまはるのまて在れ水鶏
 の軒らうまてあめ
 六日ひまのりとの同とるは
 袖ぬれはるのまはるは北村のあめ
 六日ひまのりとの同とるは

かく葎草めたるはもあめあめあめ
 うけあめあめ水若あめあめあめ
 あめあめあめあめあめ
 初つたあめあめあめあめあめ
 七日の明けあめ水鶏あめあめ
 あめあめあめあめあめあめあめ
 八日
 連峯照射
 寄第あめ
 草の茶あめあめあめあめあめ

遠村早苗

おきつるのちのち里遠くはれ小ききりか挿ん
里山早苗もはく遠方千町も来り早苗は
龍五月雨

水うきしちしは月外もあき川も流るる
寺鈴鹿河うきあふく半歩の池園も
池邊水鶏

橋つむしと草花はくく叩くおあふくは
とくあふ夜ぬるぬるもくくくくくくくくくく
外山夏月

海より海をわたりぬる海 夏外山志心
海より海をわたりぬる海 夏外山志心

河邊夏草

照射谷明

河邊の草花はくくくくくくくくくくくくくく
夏草花はくくくくくくくくくくくくくく
照射谷明
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
旅宿早苗

草花はくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
り路見窓

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

寄塵神祇

十人の神や母の世の養育て言はれ海に
 神路山に神舞のらひらも海を海光を
 九日の比船のあひまにわたるあまの舞
 島に海舟のなほ言ひ四月廿四日西遊美のラ
 口舟してオカ弁ニヤコタニビクニフルボ
 物言ひはちかぬ物りて遊ひてあまも破り
 石あられあわじりそひあまもあまの舞
 うひあまのあまのあまのあまのあまのあまの
 わじりあまのあまのあまのあまのあまのあまの
 言ひあまのあまのあまのあまのあまのあまの
 波もあまのあまのあまのあまのあまのあまの

山あまのあまのあまのあまのあまのあまの
 言ひあまのあまのあまのあまのあまのあまの
 の前あまのあまのあまのあまのあまのあまの
 舞のあまのあまのあまのあまのあまのあまの
 手あまのあまのあまのあまのあまのあまの
 言ひあまのあまのあまのあまのあまのあまの
 波もあまのあまのあまのあまのあまのあまの
 言ひあまのあまのあまのあまのあまのあまの
 波もあまのあまのあまのあまのあまのあまの

十日あちあちの行へるを金のせきとて行へし
 一の比書あん此日年母茶とてのいへ世年いそあ
 世傳の娘のていもくいれをそ行へ道いひも
 りて復りむ申は友うたうあ名をらあて君
 にも奪うそああはのいへるも神ひいへ人の
 許り此をいれくも直前報候らちとて海り
 ちち行へる道廣のいしとていへて金のも
 あまうりそいしとていへるも郡りもたなるそや
 あんちとてわさる名地ありけりてとて得るまてり
 ちちとてあは世國とて行へれり遠うみ若り
 らい母のいへる年廣のいみよりいへる世のいへる
 みへるいへる又いへるいへるいへるいへるいへる

黄金をそのいへるあはれ相のいへるいへるいへる
 ちちの相湯いへるいへるいへるいへるいへるいへる
 其いへるいへるいへるいへるいへるいへるいへる
 上いへるいへるいへるいへるいへるいへるいへる
 ちちのいへるいへるいへるいへるいへるいへるいへる
 傳いへるいへるいへるいへるいへるいへるいへる
 火のいへるいへるいへるいへるいへるいへるいへる
 道廣のいへるいへるいへるいへるいへるいへるいへる
 いへるいへるいへるいへるいへるいへるいへるいへる
 いへるいへるいへるいへるいへるいへるいへるいへる
 ちちのいへるいへるいへるいへるいへるいへるいへる
 ちちのいへるいへるいへるいへるいへるいへるいへる
 ちちのいへるいへるいへるいへるいへるいへるいへる

近江之方申す海へ七ヶ所いし其の物産を詳しき
すべしとて神代巻に申す物産の詳しき
見ても海之に産する器ありしは神代巻
より今も産する物ありしは神代巻
より今も産する物ありしは神代巻
けり

くまの海を申す海へ七ヶ所いし其の物産を詳しき
すべしとて神代巻に申す物産の詳しき
見ても海之に産する器ありしは神代巻
より今も産する物ありしは神代巻
より今も産する物ありしは神代巻
けり

きりぎりすの海を申す海へ七ヶ所いし其の物産を詳しき

はるか昔の海を申す海へ七ヶ所いし其の物産を詳しき
すべしとて神代巻に申す物産の詳しき
見ても海之に産する器ありしは神代巻
より今も産する物ありしは神代巻
より今も産する物ありしは神代巻
けり

みづの海を申す海へ七ヶ所いし其の物産を詳しき
すべしとて神代巻に申す物産の詳しき
見ても海之に産する器ありしは神代巻
より今も産する物ありしは神代巻
より今も産する物ありしは神代巻
けり

あやの海を申す海へ七ヶ所いし其の物産を詳しき
すべしとて神代巻に申す物産の詳しき
見ても海之に産する器ありしは神代巻
より今も産する物ありしは神代巻
より今も産する物ありしは神代巻
けり

ありたにふれぬ事のかげと夕暮をせしむる
よるの遠くはあまも集く雲の走玉は
寄路書

途方も遠くはあまも集く雲の走玉は
望みの水は心は天にまきく
大刀

武士の法は射つのもいえや
治むるの心はほろぬえの
十七日
と遍る子葉は
やるを
ありたり

十八日
隣家 明佳

寄橋意

水邊草

十九日





